

## 荒海2式の研究 - 浮線文直後の土器群 -

渡辺修一

千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

E-mail : s. wtnb34@mc. pref. chiba. lg. jp

キーワード：縄文時代晩期終末 連弧文 雑書文 矢頭式 田原2式

### 1 はじめに

「荒海式」という土器型式は、利根川下流域を中心とした関東東部における縄文時代晩期と弥生時代をつなぐきわめて重要なものであることはいまさら述べるまでもない。鈴木正博による「荒海式」の細分が提唱されて（鈴木正博、1981）四半世紀が経過したが、研究が一様に深化したかというと必ずしもそうでない部分がある。

千葉県内に限れば、荒海式土器とその時代に関する最も大きな成果は、成田市荒海川表遺跡の調査研究（石橋・渡辺ほか、2001）にある。この遺跡では、荒海3式期に形成された貝層をはさんで、それ以前に営まれた10号竪穴建物跡、それ以後の17号遺構という2棟の建物跡が検出された。それぞれからまとまった土器群が出土して、荒海式としては初めての遺構一括資料を得ることができた。10号竪穴建物跡出土土器群は、浮線文浅鉢またはその系譜上にある浅鉢形土器が完全に消滅し、条痕施文の粗製大型壺形土器が出現した段階の土器群で、筆者らは荒海3式古段階と位置づけた。さらにこの土器群は北関東地方の沖式土器（若狭ほか、1986）に対比され、房総における最初の弥生土器と位置づけた。

荒海式土器の時代のこのような遺構が検出されることはきわめて希少だが、四街道市御山遺跡ではピット群012と報告された建物跡が検出されており、その中を中心にとまとまった土器群

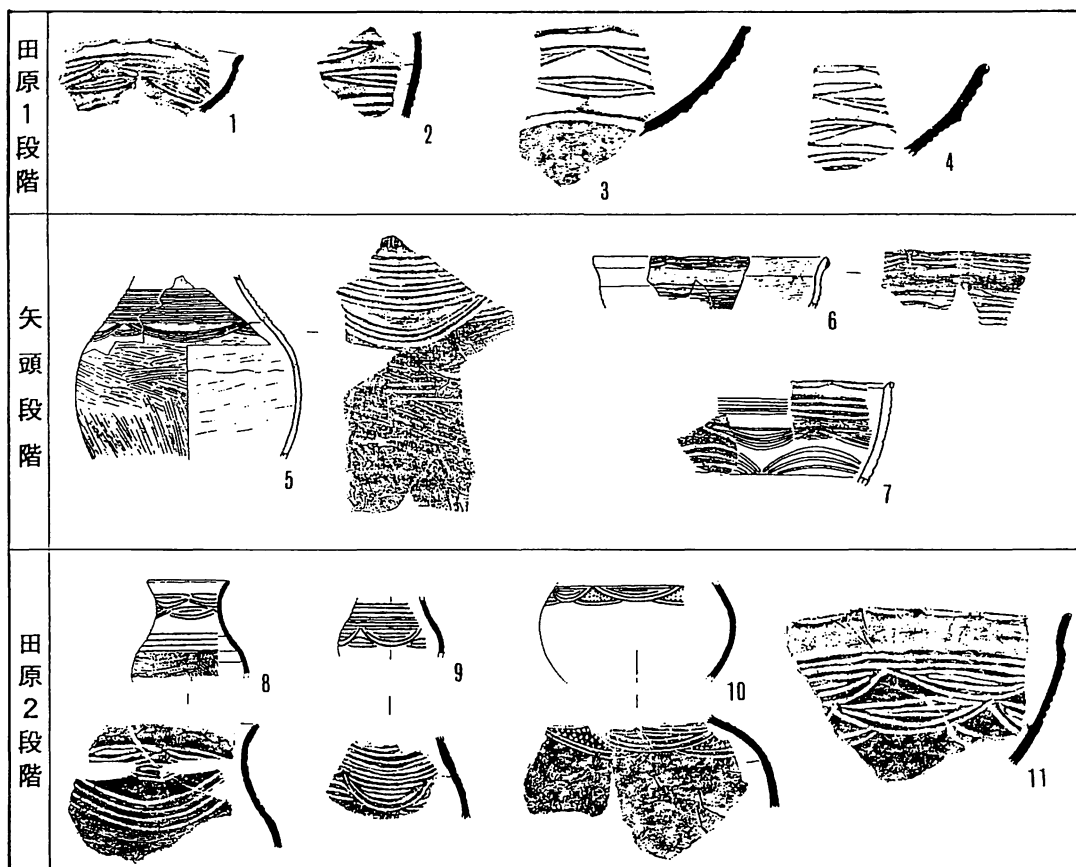
が出土している。土器群は遺構内外に広く分布するため純粋な遺構一括資料とはいえないが、浮線文浅鉢形土器がまだ盛行している荒海1式段階のまとまった土器群である（渡辺ほか、1994）。

ところが、それらの間に位置する荒海2式に該当する土器群は遺構を伴う遺跡から出土せず、出土遺跡自体も少なかった。そのため、型式学的操作はともかくとして、荒海2式土器とはどのような組成を示すのかを検証することができなかった。この時期にはもう一つ大きな問題がある。荒海1式は浮線文浅鉢形土器を指標とする最後の段階で、縄文時代晩期終末に位置づけることに異議を唱える研究者はいない。荒海川表遺跡は、房総における弥生時代の最初の段階として捉えることが妥当である。中間の時期が大洞A'式に並行することは多くの研究者の一致するところであろう。そうすると荒海川表遺跡直前の段階が、現状では縄文時代最後の土器群に位置づけられることになり、組成や各器種の特徴を荒海川表遺跡出土土器群と対比することがますます重要視される。

小稿では、千葉県内の各遺跡から出土した荒海川表遺跡10号竪穴建物跡出土土器群に先行する段階の土器を検討し、現時点における荒海2式土器の「構成」を考察したい。

### 2 「田原1式」「矢頭式」「田原2式」

東京湾を挟んだ対岸の相模、伊豆地域におい



矢頭(No.35)遺跡出土資料を中心とした連弧紋の変遷 (1・2・8~11 田原、3・4 山王、5~7 矢頭(No.35)遺跡)

図1 谷口肇による「矢頭式」とその前後

ては、田原遺跡の調査が行われて以降、同時期の良好な土器群があまり検出されなかった。しかし近年神奈川県大井町矢頭遺跡（第一東海自動車道No.35 遺跡）の調査成果が報告（西川・天野・谷口、1997）され、その中で谷口肇による浮線文最終段階以降の編年案が示された（谷口、1997・2003）。ここでは浅鉢形土器と壺形土器に描かれる連弧文の変遷過程が示され、鈴木正博によって提唱されていた「田原1式」と「田原2式」の中間に位置する土器群として「矢頭式」が提唱されている。

田原1式における連弧文は、基本的にレンズ状のモチーフによる浮線文であるが、複段構成

の上段に位置する単位の上端の浮線が水平で、結果として連弧を形成する。下段のレンズ状単位は、上段の単位の間を繋ぐように配される。田原2式における連弧文は、田原1式の連弧文が沈線化したもので、より弧を強く意識した描出がなされている。また、同様の沈線連弧文を描いた壺形土器が存在する。

「矢頭式」の連弧文は、図1の5の壺形土器に特徴的で、研磨によって浮線化してはいないものの、沈線が挟り込まれて施され、浮線手法と沈線手法の中間的な技法とされる。またそれ以外のいくつかの理由から田原1式と田原2式の間を埋める土器型式として「矢頭式」が位置

づけられている。田原遺跡の浮線文と沈線文の型式学的先後関係は明白で、基本的にそのように推移するのであろうが、谷口自身述べているように、田原遺跡における伴出関係は明らかではない。また、矢頭遺跡出土土器群、田原遺跡出土土器群ともに神奈川県内に類似資料がなく、小地域内で比較検討できない。相模、伊豆地域におけるこの編年観を検証するためには、さらに隣接地域との比較検証が必要であり、房総地域の土器群の検討は不可欠である。

### 3 房総地域の土器群

#### (1) 市原市武士遺跡第2集中地点

ここで、相模、伊豆地域における「矢頭式」や田原2式に対比される土器群を房総において探してみたい。谷口による編年案でメルクマルになっていたのが連弧文を描く土器であるが、房総半島においては、神奈川県域よりもむしろ連弧文が描かれる浅鉢形土器等が多く出土している。それらの中で、これまであまり取り上げられてこなかった市原市武士遺跡第2集中地点出土土器（加納ほか、1996）を検討してみたい。武士遺跡には、「水I式」を中心に荒海4式までを多量に出土した遺物包含層があり、第1集中地点の名で報告されている。第2集中地点は第1集中地点と距離はあまり離れていないが、より小規模な遺物集中地点である。出土土器の内容、出土状況から考えて、一時期の土器がまとまっている可能性が非常に高く、報告者も「ある程度限定された時期の廃棄単位の可能性が指摘されよう」と述べている。

武士遺跡第2集中地点出土土器を図2に示した。最も特徴的な個体は1・2の浅鉢形土器で、文様帯の中心に多条の沈線を重ねた弧状のモチーフを上下から描いて連弧文を形成している。矢頭遺跡の浅鉢例（図1の7）とは異なり、上下の単位が対向しているため単位間に菱形の空隙ができています。その空隙内は彫刻的に挟り込まれる部分と水平な沈線を重ねる部分がある。ま

た、文様帯の口縁部側にはハンガー状の浮線が巡る。図3に東京都新島村田原遺跡（杉原・大塚・小林、1967）の特徴的な主要土器を示したが、図3の6のように完全に沈線化した連弧文とは手法が異なっている。施文手法としては矢頭遺跡図1の5と似ており、浮線文から沈線文への過渡的な様相といえる。武士遺跡の浅鉢形土器としては、ほかに沈線的な施文手法による3、6と浮線文手法による4、5があるが、浮線の描出が精緻ではなく、文様単位の交点に円形の刺突が加わるという新しい要素をもっている。

浅鉢形土器（または鉢形土器）として図2の7～11も注目すべき個体である。細い沈線で流水状工字文を描いている。文様構成や器形がまったく同一というわけではないが、横芝光町山武姥山貝塚に沈線工字文をもつ著名な浅鉢形土器（鈴木公雄、1963・1981）がある。武士遺跡第2集中地点の土器群が限定された時期のものならば、山武姥山貝塚の沈線工字文浅鉢形土器の編年的位置づけも証明されることになろう。

次に武士遺跡の甕形土器及び深鉢形土器をみてみよう。それらのなかで最も特徴的な文様として、沈線及び列点による菱形区画を挙げることができよう。17～19は、2条から3条の「く」字形の沈線を交互に向きを変えて連続させることによって結果的に菱形区画を形成しているものである。20は同様の菱形区画内を横断する1条の沈線と2条の列点加わる。菱形区画にそれを横断する沈線が描かれるものはほかに24及び25があり、列点が添うものが多いようである。また、27は菱形区画に入組渦文ないし渦文が伴う個体があることを示す。ほかには、口縁部や肩部に平行沈線を巡らせる甕形土器または深鉢形土器、条痕施文だけのもの、頸部に沈線文様を施し複合口縁をもつ甕形土器などがみられる。35・36は肩部（胴部上位）に綾杉文をもつ半精製の鉢形土器である。

これらが限定された時期の産物であると完全

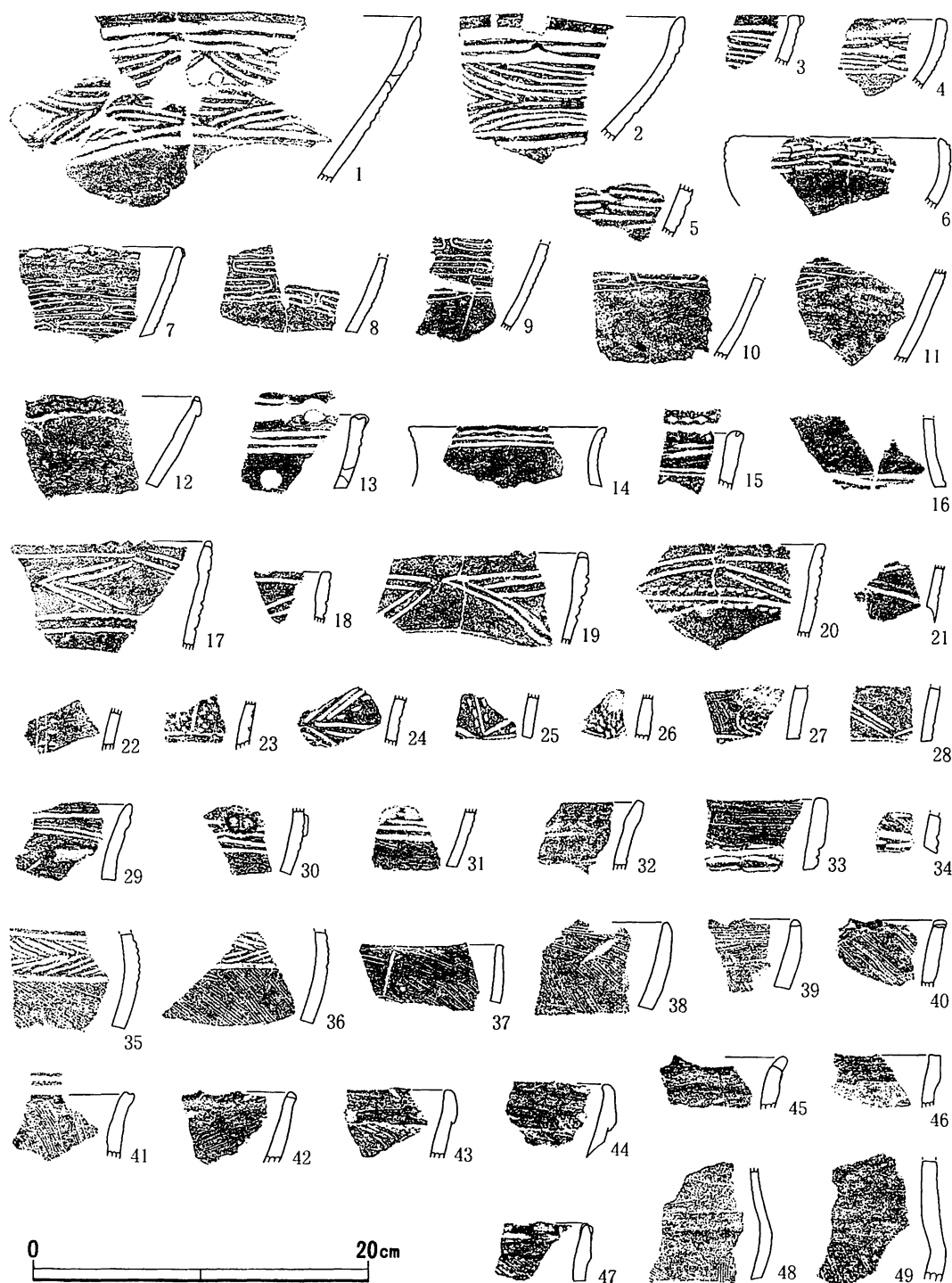


図2 市原市武士遺跡第2集中地点出土土器 (1/4)

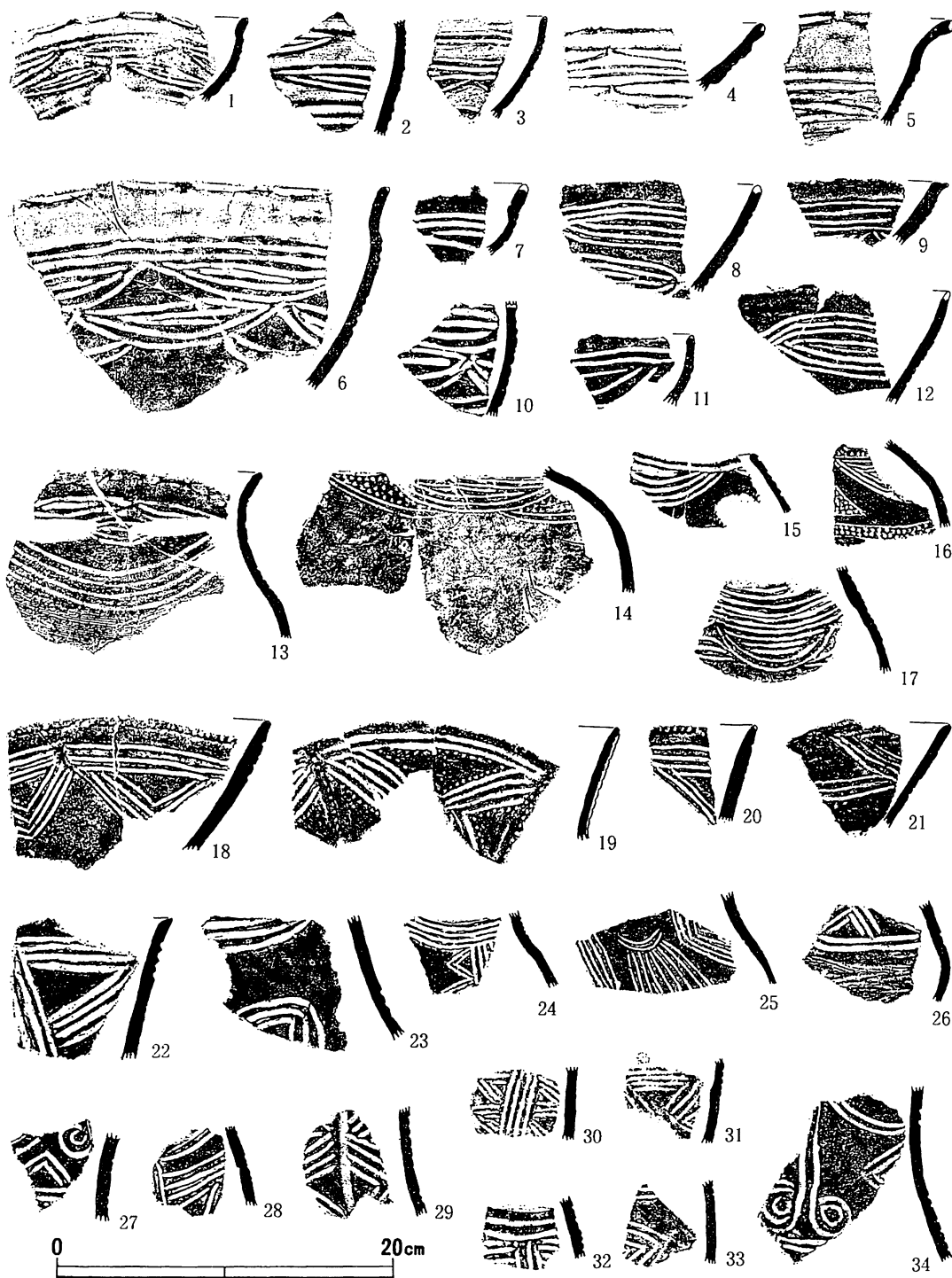


图 3 東京都新島村田原遺跡出土土器 (1/4)

に証明されているわけではないが、武士遺跡第2集中地点の出土状況は、他遺跡と比べて一括性をもつ可能性の高いものである。連弧文の特徴からすると、神奈川県矢頭遺跡の土器群と同時期であると想定されるが、その時期の房総における土器組成は、

**浅鉢形土器** 浮線文浅鉢の系譜上にあるもので、連弧文、工字文を含む沈線文様と技法的に退化傾向のある小型の浮線文浅鉢で構成される。

**鉢形土器** 前代から継承される横位綾杉文をもつ鉢形土器がある。

**甕形土器** 2～3条の沈線、列点によって並行沈線、菱形区画とそれに付随する文様単位によって構成されるいわゆる雑書文系の頸部文様をもつものがある。ほかに頸部無文帯をもつ条痕施文の粗製甕形土器がある。

**深鉢形土器** 有文のものとしては平行沈線をもつもの程度であろうか。ほかに条痕または無文の砲弾型深鉢形土器がある。

という基本構成が仮に想定される。

## (2) 四街道市御山遺跡第Ⅳ地点

筆者が報告し、ある時期を画する土器群の可能性を指摘してきたものに四街道市御山遺跡出土土器がある(渡辺ほか、1994)。遺構を伴う第Ⅰ地点、第Ⅱ地点の中核部はある程度の一括性を考えることができ、それらは荒海1式段階の土器群である。対して第Ⅲ地点、第Ⅳ地点の出土状況に必ずしも一括性はなく、慎重に取り扱う必要があるが、武士遺跡と同様の土器組成を抽出することができる土器群である。まず図4に示した御山遺跡の第Ⅳ地点出土土器を検討してみたい。

浅鉢形土器は数点ある。矢頭遺跡、武士遺跡との関連では、図4の1が完全な連弧文を描くものであることで注目される。非常に小型の土器で、弧線を構成する沈線は2条しかない。浅鉢形土器2は連弧文と断定できないものだが、文様単位間を埋める水平な多条沈線をもつ武

士遺跡の連弧文浅鉢の系譜上に置いて考えるべきであろう。ここでは3、4のような浮線文浅鉢も出土している。これらの伴出関係は不詳であるが、伴う可能性もあると考えておきたい。しかし浅鉢形土器1、2の施文手法は、矢頭遺跡や武士遺跡と比べて完全に沈線化しており、後出的である。

壺形土器が4点ある。7は浮線手法を用い、8は多条の平行沈線であるが、いずれも小片で全体の文様構成等が不明であるため、伴出関係については断定的な論議はできない。

甕形土器は特徴的である。7個体を図示したが、口縁部が遺存する4個体のうち3個体が複合口縁をもつ。文様帯は頸部にあり、ほとんどが3条の沈線で構成される。10と11は3条沈線による菱形区画が文様の基本になっている。12の主文様も菱形区画であるが、区画外に渦文が描かれ、さらに刺突が充填される。なお、10にも菱形区画を構成すると思われる3条沈線に隣接して区画外に向かって2条の沈線が出ており、区画外の渦文である可能性が高い。13と14も3条沈線による区画と刺突充填の組み合わせである。これらは当初三角文と解釈したが、菱形文である可能性もあり、そうすると12に近い基本文様となる。15は2条の沈線と沈線間列点によって菱形区画と区画内横断線、区画外に渦文が配されている。これらの甕形土器は、小破片だけでは文様の印象が異なるが、基本的な文様構成では強い共通性をもっている。

御山遺跡第Ⅳ地点の土器群は、浮線文浅鉢形土器の系譜上にある連弧文浅鉢形土器と雑書文系の甕形土器によって特徴づけられる。その点では武士遺跡第2集中地点と共通性をもつが、連弧文の施文技法は明らかに後出的であり、「矢頭式」よりも「田原2式」に対比されるべきであると考えられる。

## (3) 千葉市緑区高沢遺跡

連弧文を描く浅鉢形土器を出土した遺跡にはさらに千葉市緑区高沢遺跡がある(関口ほか、

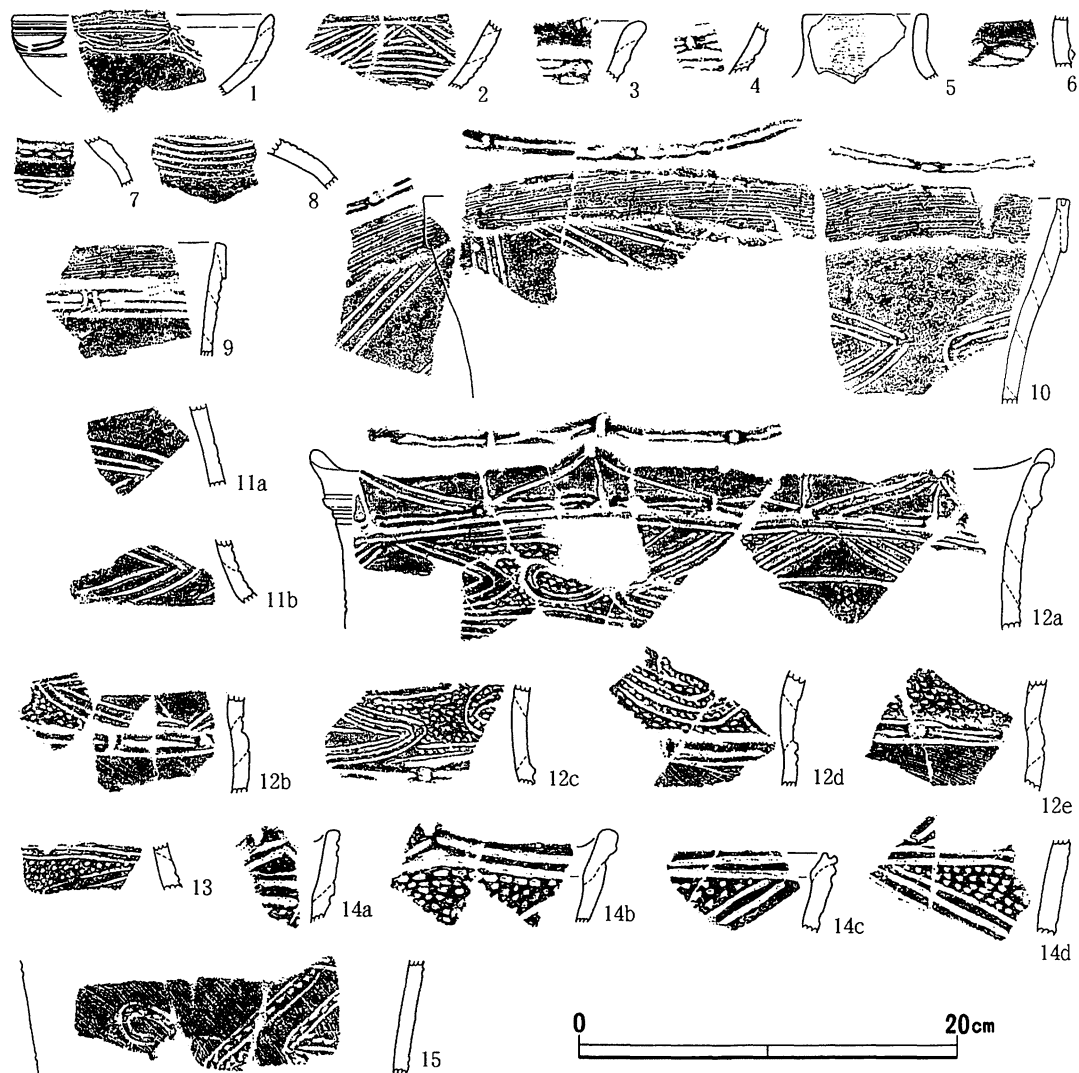


図 4 四街道市御山遺跡第Ⅳ地点出土土器 (1/4)

1990)。この遺跡では古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴建物跡や平地建物跡が密集して検出され、それ以前の遺構、遺物包含層は相当に攪乱を受けた状態であった。竪穴建物跡覆土内からの出土が多く、全体としては荒海 1 式から荒海 3 式にかけての土器がある。しかし出土した遺構と出土点数の分布密度から、大きく 3 群に分けられ、そのうち C 群とされたところから荒海 2 式以降の土器が出土した。そこで図

5 には C 群出土の土器を図示する。

1 が連弧文を描く浅鉢形土器である。地文に捺糸文をもち、口縁部に 3 条の平行沈線を巡らせ、その下に 2 条 (以上) の沈線で連弧文を描いている。手法としては完全な沈線文様で、文様構成は御山遺跡第Ⅳ地点の浅鉢形土器 (図 4 の 1) と同じである。2 は壺形土器で、3 ~ 4 条の沈線で文様を描く。小片ばかりなのでよくわからないが、菱形区画のように見えるもの

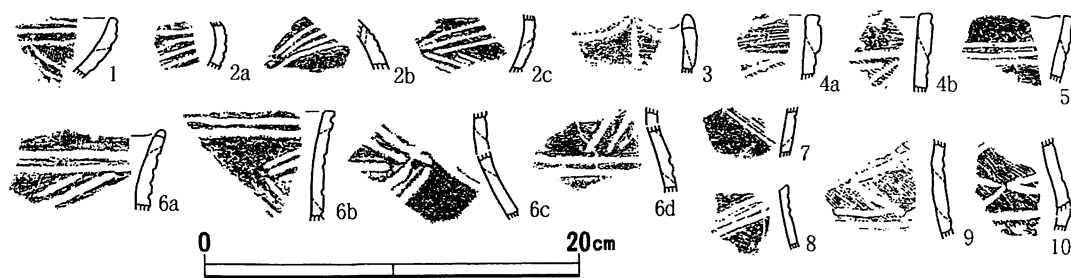


図5 千葉市緑区高沢遺跡出土土器 (1/4)

連弧文を構成している可能性もあろう。

甕形土器では、3と4複合口縁をもつ口縁部破片で、御山遺跡第Ⅳ地点では特徴的だったものである。頸部文様としては、6から8が2～3条の沈線によって菱形区画を描き、とくに構成がわかりやすい6は区画内に横断する沈線を加えている。9、10は必ずしも同段階でないかもしれないが、縦位の稲妻状文が横方向に連続して結果的に菱形連繫文状になるもので、この遺跡では目立つ存在である。この先、他遺跡との比較で問題となるのであえて示した。

高沢遺跡の場合は、明確に土器組成を示せるわけではないが、連弧文を施す浅鉢形土器を含む土器群には雑書文系甕形土器が存在するという蓋然性を高める資料といえよう。

#### (4) 四街道市御山遺跡第Ⅲ地点

先に御山遺跡第Ⅳ地点出土土器群を検討したが、同じ御山遺跡の第Ⅲ地点出土土器群(渡辺ほか、1994)も近似する内容をもっている。代表的な土器を図7に示した。

1から8が浅鉢形土器である。ここでは明確に連弧文を描く浅鉢形土器はない。まず注目したいのが2及び3(同一個体の可能性がある)である。口外帯をもち浮線的手法を残した浅鉢

形土器であるが、基本は平行沈線と斜行沈線の組み合わせである。拓影では3の左端に匹字文にみえる部分があるが、ここは丁寧に扱われず刺突によっている。御山遺跡第Ⅲ地点より古い四街道市池花南遺跡出土土器(図6)のなかにこの元になる文様があり(渡辺、1991)、「大洞A2式」段階の「変形匹字文」(鈴木正博、1985)である。図7の2、3は「変形匹字文」の系譜上にあると理解できる。一方1は、同様に平行沈線と斜行沈線の組み合わせにみえるが、拓影右寄りの土器片接合部(文様単位接続部)で左右対称になっていると思われるふしがあり、連弧文あるいはそれに近い文様を描いている可能性が高い。

その他の浅鉢形土器には浮線文をもつものが4個体あってやや数が多い。武士遺跡第2集中地点でも浮線文浅鉢は出土しているから、先述の浅鉢形土器と同時期にあってもおかしくはないと考えられるが、これらの浮線文の施文手法は比較的丁寧にあり荒海1式段階のものと同様である。時期が遡るものが混在しているかもしれない。また、9から14が壺形土器である。口縁部に扁平化した浮線文帯をもつ9、口縁部に平行沈線を巡らせる10、11、肩部に彫刻的な工字文帯をもつ12、頸部と肩部の境に段をもち2条の沈線で幾何学文様を描く14など多種多様なものがあるが、ここでは詳述は避けさせていただく。

15以下が甕形土器及び深鉢形土器である。御山遺跡第Ⅳ地点とともに複合口縁をもつ甕形



図6 四街道市池花南遺跡出土「変形匹字文」の浅鉢形土器 (1/4)



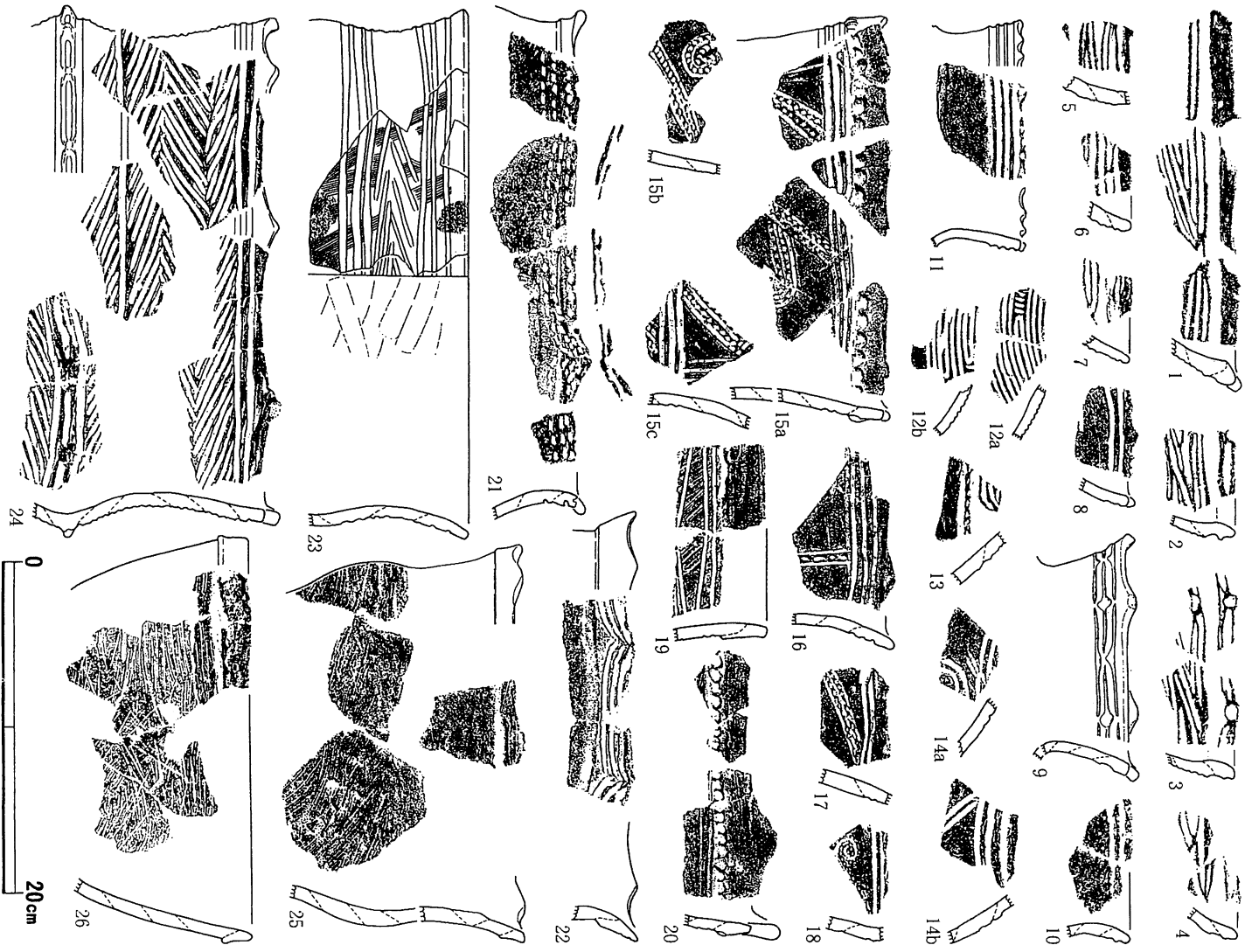


図7 四街道市御山遺跡第Ⅲ地点主度土器 (1/4)

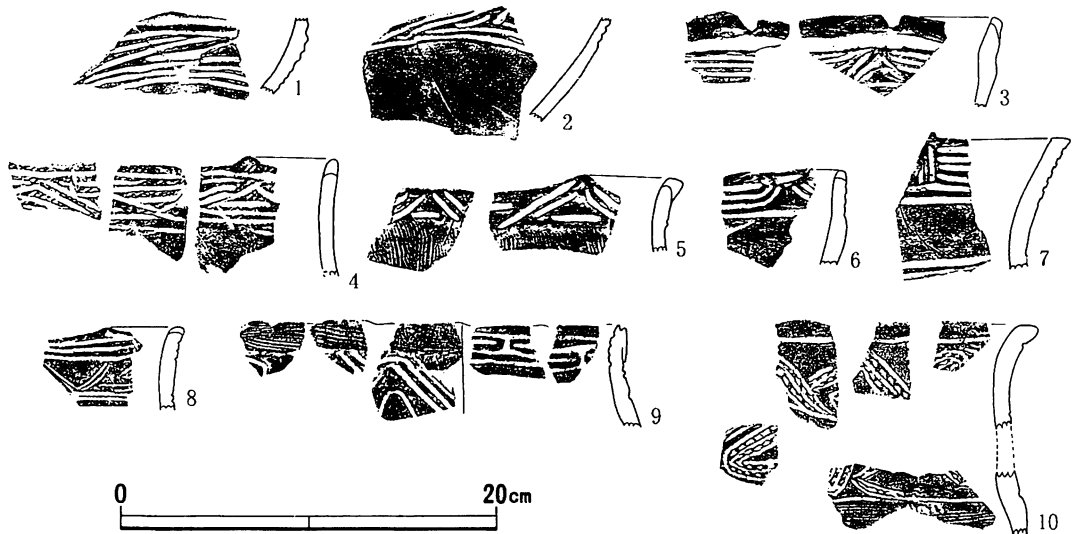


図8 千葉市稲毛区子和清水遺跡出土土器 (1/4)

土器が多い。また、第Ⅳ地点と同様に沈線及び列点による雑書文系の文様をもつものが多い。15はその典型であるが、この個体は渦文が菱形区画内にあることが特徴でもある。第Ⅳ地点の同種甕形土器と対照的である。甕形土器としても一つ注目しておきたいのが横位綾杉文をもつ23及び24である。23は口縁部と肩部に3条ずつの平行沈線が巡り、頸部に断続的な横位綾杉文が巡るもの。24は水平な沈線及び突帯を挟みながら頸部だけでなく胴部にも綾杉文を埋め尽くしている。この地点からは、これら以外にも同種の土器の破片が出土しているから、第Ⅲ地点の土器群に綾杉文を巡らせる甕形土器が伴う可能性は十分といえよう。

御山遺跡第Ⅲ地点の土器群は、変形匹字文系及び連弧文系の文様を中心とする浅鉢形土器、雑書文系の甕形土器、綾杉文系の甕形土器を特徴的にもち、武士遺跡第2集中地点に比較的構成要素が共通する。また、浅鉢形土器の文様に浮線手法が残る点からしても、両者は同じ時期に置くことができると考えられる。

(5) 千葉市稲毛区子和清水遺跡

御山遺跡第Ⅲ地点出土土器群により近い土器

群を出土した遺跡に千葉市の子和清水遺跡（田中・築瀬ほか、1987）がある。この遺跡の遺物包含層は、荒海1式から荒海4式以降までの土器が出土しており、出土状況からそれらを時期ごとに分けるのは不可能な状態である。したがってここでは特徴的な土器を抽出することにする（図8）。

一見して注目されるのは、1から3の浅鉢形土器であろう。1と2は図7の2と3にきわめて近似し、変形匹字文からの変化文様と考えられる。また1の文様帯の上位、口縁部側にはハンガー状の浮線が巡るようであり、武士遺跡第2集中地点の連弧文を描く浅鉢形土器（図2の1・2）に共通する。3は図7の1に近似し、連弧文系の文様とみられる。単位文様間に三角形を形成してそこを挟む手法が採られ、やはり武士遺跡の連弧文に共通する要素である。逆にこの事実から、御山遺跡図7の1も同様の手法、構成が採られていたと考えられる。

次に注文すべき甕形土器をいくつか検討してみたい。4から7は口縁部付近に文様帯をもつ甕形土器である。4及び5は平行沈線と斜行沈線を組み合わせている。5は三角連繫文化して

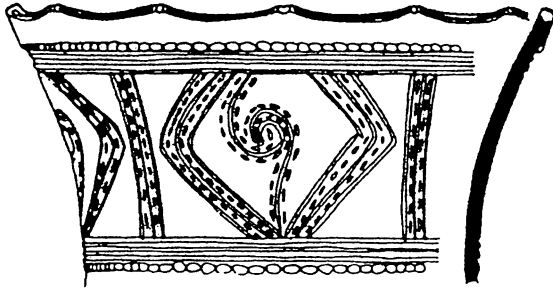


図9 横芝光町山武姥山貝塚出土  
雑書文系甕形土器 (1/4)

いるが、4の文様構成は1と5の中間的な様相を呈している。6は浅鉢形土器3の文様と共通性があり、7は接続部が縦位のスリット状沈線となっている。これらは、浅鉢形土器の主文様が沈線化したものが、浅鉢形土器の衰微とともに甕形土器に取り入れられていく過程を示すものと考えられる。なお、8の三角連繫文風の文様も5と同じ系譜で捉えられる可能性もあるだろうか。

9と10は3条沈線によって菱形区画を描いたと考えられる甕形土器である。9は複合口縁をもち、3条の沈線で菱形区画を構成する。区画内の文様ははっきりしないのが残念である。10は3条の沈線と沈線間の列点で文様が構成される。その点では御山遺跡第Ⅲ地点(図7の15)や山武姥山貝塚の著名な土器(図9、鈴木公雄、1981)に酷似するが、この個体の破片は断片的で文様構成が不詳であるのが惜まれる。いずれにせよ、以上取り上げた子和清水遺跡の土器の一部は、浅鉢形土器、甕形土器ともに共通性が高い御山遺跡第Ⅲ地点と同じ段階に置かれることは間違いあるまい。

#### (6) 多古町塙台遺跡

「志摩城跡」として報告された遺跡で、弥生時代中期前葉から中葉の壺棺再葬墓群が調査されて全国的に著名となった遺跡である(荒井ほか、2006)。中世城郭としても知られるが、包蔵地として旧来よばれていた「塙台遺跡」の名

で取り扱う。

塙台遺跡の壺棺再葬墓群のうち南群が分布する台地縁辺部の西側緩斜面に、多量の土器を出土する遺物包含層が検出された。「包含層1」と報告されている。包含層1出土土器群の時期は幅広いが、荒海1式から荒海3式に対比できるものが多い。小稿で取り上げている土器群に対比されるものも出土しているので、ここで抽出してみたい(図10)。

1から8に浅鉢形土器を例示した。浅鉢形土器の圧倒的多数が荒海1式期の浮線文浅鉢であり、1から2が該当する。ここではレンズ状浮線文を施すものを例示した。そのほかにはやや特異にみえる文様がある。3はこの破片だけでは明確な判断は下せないが、狭い文様帯幅のなかで2本の浮線が「Z」字状に接続することによって三角連繫状の文様を構成する。これは言い換えれば水平な線と斜行する線の組み合わせである。4や5も同様で、施文手法は浮線文でありながら斜行する線については突部である浮線よりも凹部である沈線部分に強い施文意識があるようにみえる。また4については、池花南遺跡例(図6)で浮線匹字文となっている箇所にも御山遺跡第Ⅲ地点例(図7の3)と同様の円形刺突が施されている。7は一見レンズ状浮線文にみえる複雑な文様であるが、半ばは凹部に施文意識があるように思われる。そして8は沈線化したレンズ状文である。ここでも全体として浮線文から沈線文への流れがあり3から7のような過渡的なものや8のように完全に沈線化したものは数が非常に少ない。また、3以降の浅鉢形土器を武士遺跡第2集中地点や御山遺跡第Ⅲ地点と同段階に置くことについての異論は少ないだろう。

次に甕形土器ほかを検討する。11から17は綾杉文が施される土器である。頸部文様のものもあるが、11から14は胴部文様である。武士遺跡第2集中地点例(図2の35、36)と同趣

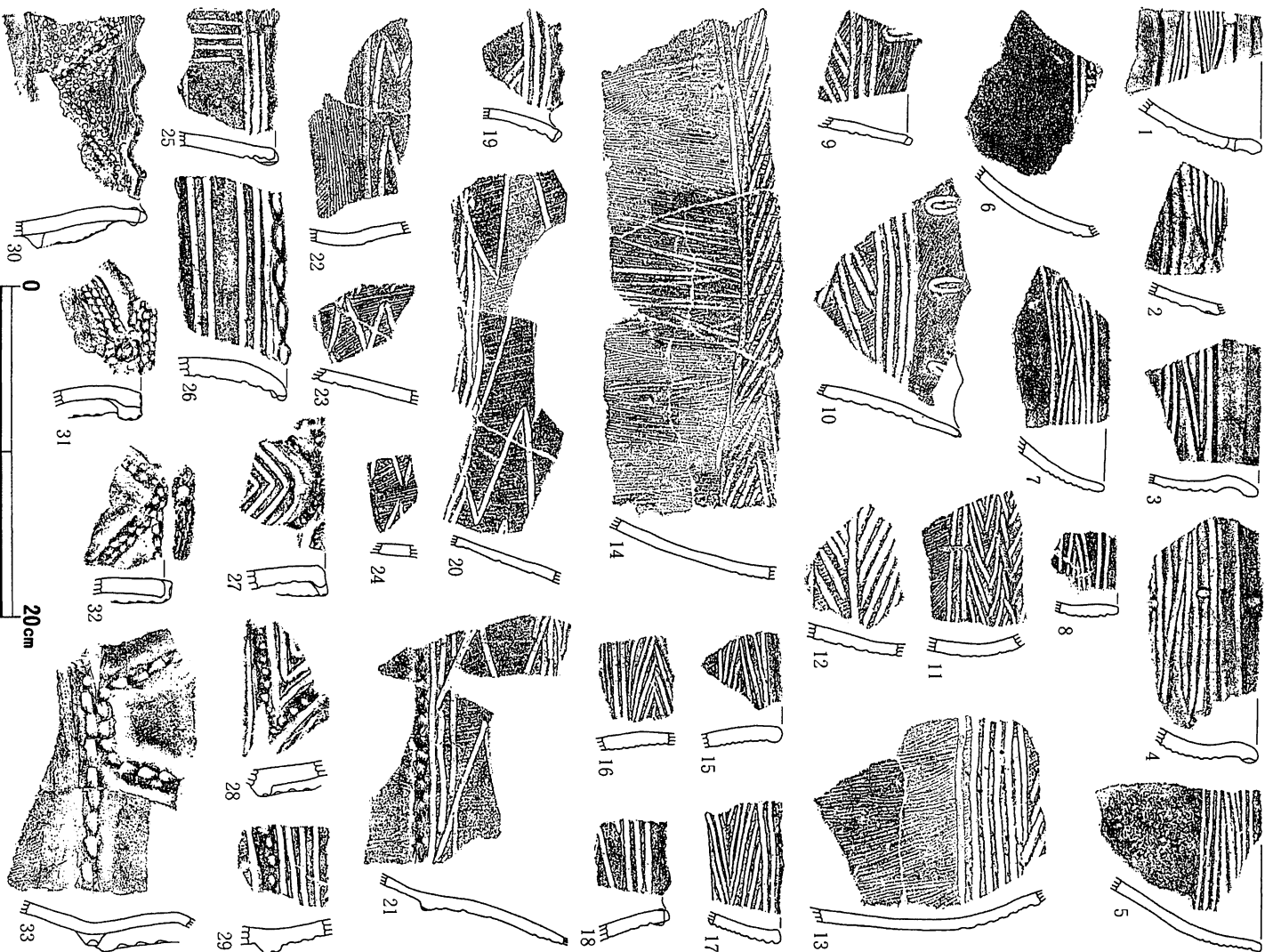


图 10 多古町靖台遺跡包含層 1 出土土器(1) (1/4)

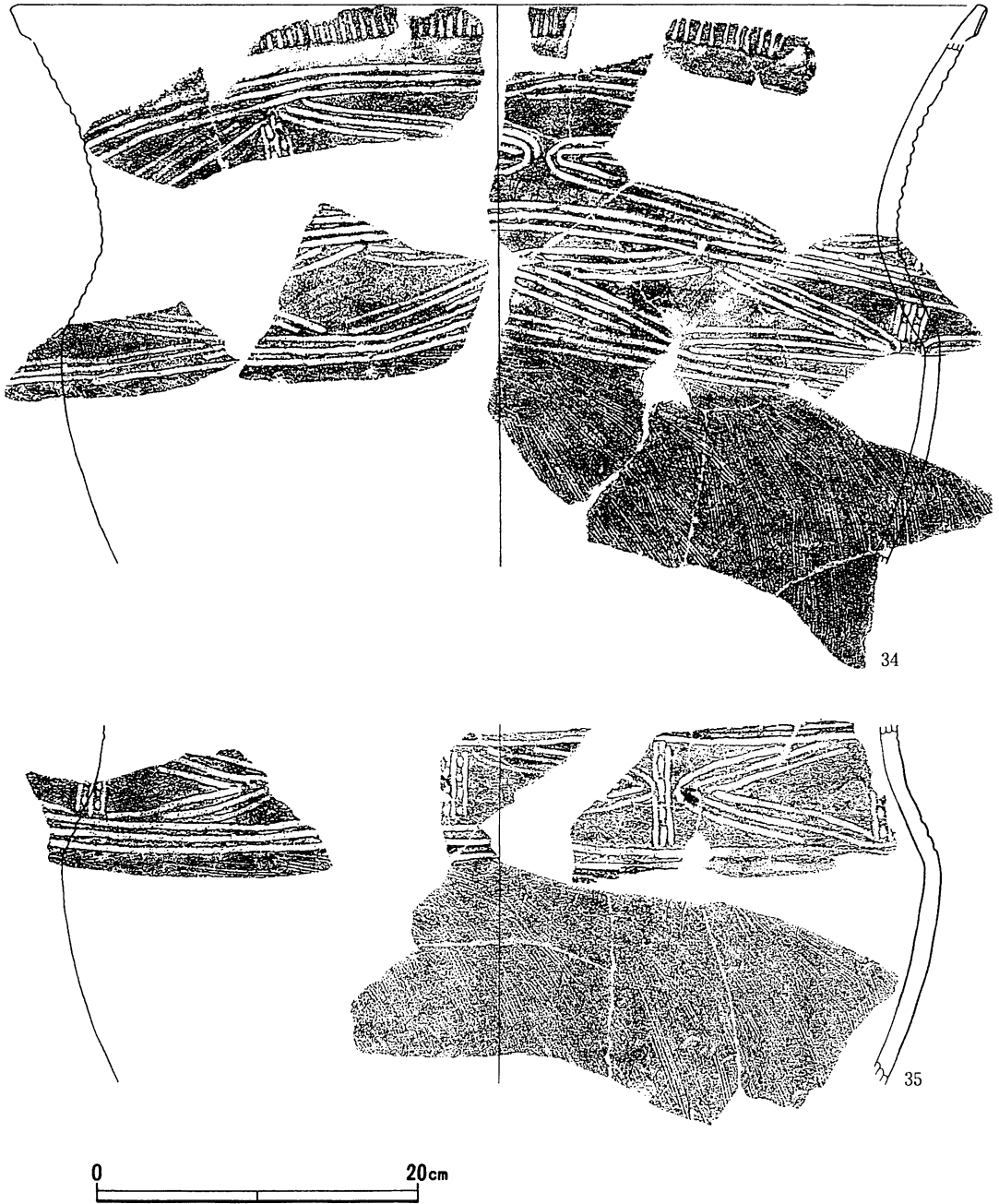


図 11 多古町塙台遺跡包含層 1 出土土器 (2) (1/4)

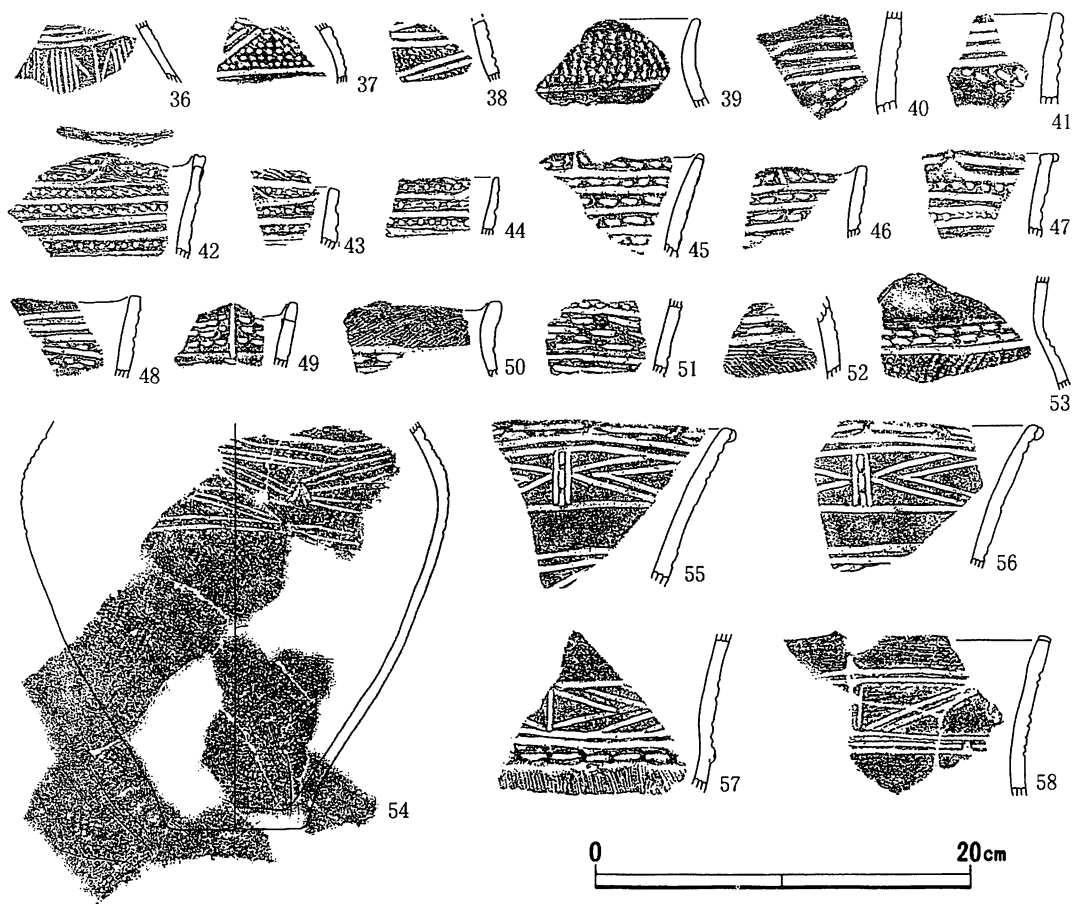


図 12 多古町塙台遺跡包含層 1 出土土器 (3) (1/4)

のものといえよう。

千葉市高沢遺跡でも取り上げたが、塙台遺跡でも稲妻状文がやや目立つので言及することにする。高沢遺跡で例示したものはあきらかに菱形を形成することを意識したものであったが、20 から 22 ではまったく意識されていない。これらの稲妻状文が「氷Ⅰ式」の稲妻状文に起源をもつなら、塙台遺跡のこれらの稲妻状文は型式学的に高沢遺跡に先行することはあきらかである。稲妻状文をもつ甕形土器が荒海Ⅰ式土器を主体とする土器群からほとんど出土しないので、おそらく次段階になって甕形土器の頸部文様として採用されていく当初の段階を示すので

はないかと推察される。また、高沢遺跡のような菱形を意識した稲妻状文（図 10 の 23、24 も同様）がその次の段階に位置し、さらに次の段階で定型化した菱形連繫文に変化するものと考えられる。

次の 25 から 29 は数条の沈線を用いて文様を構成している。単純な平行沈線ではなく、菱形区画や三角形を構成するものがこの段階に位置づけられると考えるが、塙台遺跡では突帯を組み合わせるものが目立っている。さらに沈線を用いずに突帯だけで文様を構成するものや突帯と刺突を組み合わせるもの（30～33）がある。34、35 は 3 条の沈線を基本として菱形区画を

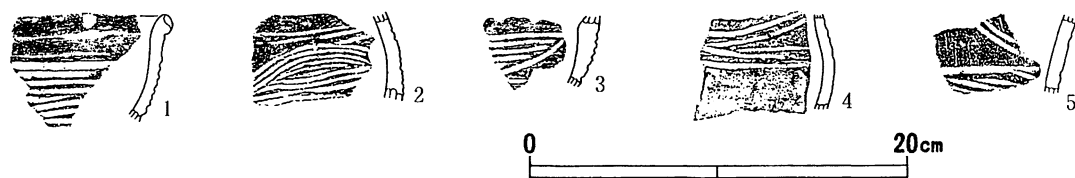


図13 多古町塙台遺跡包含層3出土土器 (1/4)

描く甕形土器である。34をみると、縦位の沈線を密に連続させる複合口縁をもち、頸部の上下と中央に3条単位の平行沈線を巡らせて文様帯を2段に画し、いずれの段も「く」字状の3条沈線で菱形区画を形成している。35も全体の構成は同様と考えられる。34は上段の菱形区画内には縦位の3条沈線と沈線間列点加わり、下段には菱形区画間に同様の文様加わる。35は上段の文様構成が不明であるが、菱形区画内には3条の沈線と沈線間列点の、区画間には2条の沈線と沈線間列点による縦位線加えられている。また、両者ともに渦文を伴わず、比較的単純な文様構成といえる。55、56も同種の文様をもつものであるが、口唇部にメガネ状付帯文風の突帯を巡らせる。また、この個体は基本的に2条の沈線を単位として文様を構成している。文様帯が分割されて2段(以上)の菱形区画をもつが、ここでも渦文等は伴っていない。ほかに頸部に菱形区画をもつ可能性がある甕形土器として9、10もあげられる。口縁部に「U」字状の沈線を等間隔に配し、その下に3条ないし4条の平行沈線を巡らせて口縁部と頸部を画する。頸部の主文様帯ははっきりしないものの、2条を単位とする沈線で菱形区画を形成して、区画外にやはり「U」字状沈線を加えるらしい。

図13の36から53は沈線、列点、刺突によって文様が構成される土器である。全体の文様構成がわかるものが少ないが、これらの特徴をもつ土器は、荒海1式あるいは荒海3式段階の土器群にほとんど含まれることはない点を注視しておきたい。

塙台遺跡では、台地上東半部に包含層3として調査された遺物包含層がある。時間幅が広い割に遺物出土量は少なく、客観的な土器群のまとまりを指摘できないのが残念であるが、非常に特徴的な土器片を含んでいるので触れておきたい。1と3が浅鉢形土器であろう。1は文様帯の遺存度が低いので断定はできないが、浮線手法を強く残したものであり、御山遺跡第Ⅲ地点や子和清水遺跡の浅鉢形土器(図7の1など)に対比されるのではないだろうか。それに対して3は完全に沈線化した手法で連弧あるいはレンズ状モチーフを描いている。新島村田原遺跡の「田原2式」(図3の6以降)に近似する文様がある。2は壺形土器かと思われる。主文様は沈線で描かれたレンズ状文で、器形は異なるものの、やはり田原遺跡の「田原2式」のなかに酷似する文様(図3の12など)がある。4、5は甕形土器であろうか。やはり小片のため明確ではないが、連弧文を描くのではないかと考えられる。文様は2条の沈線で構成されるようなので、御山遺跡第Ⅳ地点(図4の1)あるいは高沢遺跡(図5の1)の浅鉢形土器に近似することになる。田原遺跡とは施文手法が異なる場合もあるものの、塙台遺跡包含層3には「田原2式」に対比される土器が多数含まれる点は注目に値する。

.....

荒海2式を含む土器群は上記各遺跡に限られるものではないが、ここでは千葉県内で知られた主要土器群、とくに「矢頭式」や「田原2式」に比較可能な浅鉢形土器や雑書文系の甕形土器を含む土器群を列挙してきた。これらは一時期

を画する特徴をもつものと認められるが、これまでの記述でわかるように概ね二段階にわけて考えることができ、相模以西の「矢頭式」及び「田原2式」と対比することも可能なようである。そこで次に、これまでにみてきた土器群のなかで器種ごとに変遷の過程を想定し、最後に荒海2式とは何をもって画されるべきか、どのような土器群と考えるべきなのかを述べたい。

#### 4 土器群の変遷

##### (1) 浅鉢形土器

最初に浅鉢形土器を検討したい。前節でみた浅鉢形土器は、おもに連弧文系及び変形匹字文系の文様をもつものであった。その新古の特徴を最もよく表すのは御山遺跡第Ⅲ地点と同遺跡第Ⅳ地点の浅鉢形土器といえる。御山遺跡第Ⅲ地点の浅鉢形土器には、浮線文、連弧文系、変形匹字文系の三種があり、後二者についても浮線の施文手法を色濃く残すものであった。また、これらに非常に近似する浅鉢形土器は子和清水遺跡にも含まれていた。子和清水遺跡の連弧文系の浅鉢形土器には、文様単位接続部の下に三角形の彫刻的な挟りが加えられており、その部分が失われている御山遺跡第Ⅲ地点の同種土器についても同様と考えられた。同様の挟りの手法は、市原市武士遺跡第2集中地点の連弧文浅鉢形土器にも認められたが、この個体には文様帯の上下に浮線手法がまだ残されていた。浮線文の単位文様を表出するために当然ながら挟りから研磨の工程が必要だが、主文様が沈線化する際の当初の段階で単位文様間に残存したと考えるのが自然であろう。ところで、この段階の浅鉢形土器のなかに浮線文を主文様としてもつものが残存するかどうかについて明確な結論は出せないが、手法的に退化した文様をもつものが共伴する可能性は大きいと考えておく。

これらに対して、御山遺跡第Ⅳ地点の浅鉢形土器には、変形匹字文系の文様はなく、連弧文

は完全に沈線手法で描かれていた。埴台遺跡については出土土器の時間幅が大きく、それらが混在した出土状況ではあったが、包含層1出土浅鉢形土器は御山遺跡第Ⅲ地点の段階のものが主体を占め、包含層3出土の浅鉢形土器や壺形土器などは御山遺跡第Ⅳ地点の段階のものが主体を占めると考えられる。

御山遺跡第Ⅲ地点出土浅鉢形土器及び同遺跡第Ⅳ地点出土浅鉢形土器の特徴は、それぞれが谷口肇のいう「矢頭式」、「田原2式」の特徴に対比されると思われる。子和清水遺跡の浅鉢形土器は、基本的には御山遺跡第Ⅲ地点のそれと同じだが、施文手法はより沈線的であり、実際に時間差があるかどうかはともかくとしてやや後出的である。また、土器群全体にみる浅鉢形土器の組成比率は、この時期の土器群に一括性があるものがないため言及が難しい。しかし感覚的にいえば、御山遺跡第Ⅲ地点の段階よりも同遺跡第Ⅳ地点の段階に浅鉢形土器は少ないと思われる。そして、さらに次の段階には、浮線文浅鉢を継承する浅鉢形土器は基本的に伴わなくなると考えられる。

##### (2) 甕形土器

甕形土器は浅鉢形土器ほどには明確な傾向を指摘することができない。逆にここでは浅鉢形土器の典型例を出土した遺跡の甕形土器を比較してみることにしたい。まずこの時期に最も特徴的な雑書文系の甕形土器を比較してみよう。浅鉢形土器の特徴から古い段階に置けるのは武士遺跡第2集中地点、御山遺跡第Ⅲ地点、子和清水遺跡、埴台遺跡包含層1である。

武士遺跡第2集中地点が最も一括性が高いと判断される資料であるが、ここでは菱形区画だけあるいは菱形区画に区画内を縦横断する沈線が組み合わさるものといった単純な構図が目立ち、列点は伴わないか沈線に添うものが多い。区画内を刺突で充填するものはみられない。埴台遺跡包含層1は一括性があるとはいえない資料であるが、浅鉢形土器だけでみれば、完全に



文様が沈線化した新しい段階の浅鉢形土器をほとんど含まず、古い段階の資料が主体になっていると判断される。そこでみられた雑書文系の甕形土器は、やはり菱形区画と縦断線で構成されるものが主体であった。そして、列点はあまり多用されていない。それらに対して、御山遺跡第Ⅲ地点の雑書文系甕形土器は、文様を描出するのが沈線3条に沈線間列点を加えたものが基本である。すべての個体の文様構成がわかるわけではないが、菱形区画+縦断線に加えて渦文を付加する文様をもつものが明確に多い。御山遺跡第Ⅲ地点にきわめて近似した浅鉢形土器を出土している子和清水遺跡でも類似の文様をもつ甕形土器が出土している。型式学的には、列点の使用頻度と文様構成の複雑化から、武士遺跡第2集中地点及び埴台遺跡包含層1の甕形土器を古く、御山遺跡第Ⅲ地点及び子和清水遺跡を新しく考えるのが妥当であろう。全体的には、これらの文様を描出する沈線は3条を束ねるものが圧倒的である。しかしながら、古い段階と判断される当該文様には、武士遺跡第2集中地点、埴台遺跡包含層1ともに2条沈線で構成されるものがあり、個体単位で単純に3条沈線から2条沈線と決めつけることもできない。

浅鉢形土器で新しい段階と判断された御山遺跡第Ⅳ地点であるが、雑書文系甕形土器にはさらに複雑化した文様をもつものと単純な文様をもつものの両者が存在している。御山遺跡、とくに第Ⅳ地点の場合、一括性のある出土状況ではないので出土土器すべてが同時性をもつものではない。しかし第Ⅲ地点になかった特徴を抽出してみると、菱形区画内に刺突充填が目立つこと(図4の12)、菱形区画間に刺突充填が目立つこと(図4の12~14)があげられる。また同時に沈線間列点もみられる。なお、刺突充填を多用する雑書文系甕形土器は山武姥山貝塚からも出土している。いずれにしても、これらの雑書文系甕形土器は3段階に分けられる可能性

がある。

ところで、この時期の甕形土器には複合口縁をもつものが多い。元来、横位の燃糸文あるいは細密条痕を施す複合口縁から発するものであるが、荒海1式では、それ以上の装飾は口唇部に刻目などを加える程度である。頸部文様帯をもつものも数が少ない。しかしその後、口縁部下端に刻目を加えたり、単純な沈線を加えて装飾性が付加されるのが荒海2式の特徴ともいえる。先ほど述べた刺突充填を多用する段階の甕形土器にあっては、御山遺跡第Ⅳ地点の土器(図4の12)の口縁部に三角連繫文がみられるのも特徴的である。これは刺突を用いる山武姥山貝塚の甕形土器の口縁部(図14参照)にも認められ、新しい段階の甕形土器を特徴づけるようである。この段階では頸部の主文様帯に三角連繫文は出現しないし、次段階の三角連繫文と同一の施文手法というわけでもないが、注目すべきことかもしれない。とくに御山遺跡第Ⅳ地点のそれは群馬県沖Ⅱ遺跡(若狭ほか、1986)ほかの「冲型三角連繫文」に近い構成をとる点も注目される。

さて、雑書文系甕形土器は次の段階にどう変遷するのだろうか。筆者らが荒海川表遺跡の報告で荒海3式古段階とした10号竪穴建物跡出土土器群のなかには雑書文系菱形区画をもつ土器が明確に存在する。基本的に2条の沈線で文様が構成されることと、区画単位の交点にスリット状沈線が加えられるようになることが大きな変化である。前段階では刺突充填の多用を新しい段階の特徴として指摘できたが、荒海川表遺跡では刺突充填は用いられない。また、荒海貝塚にも刺突充填は基本的に存在しない。同じ段階と考えられる千葉市緑区椎名崎遺跡(上村、1979)の例では、菱形区画と渦文を組み合わせると思われる頸部主文様帯全体に刺突文が充填される。刺突文を用いるかどうかは集団の個性に依存する可能性もあるが、房総全体としてみれば、次の段階には刺突充填があまり用いられ

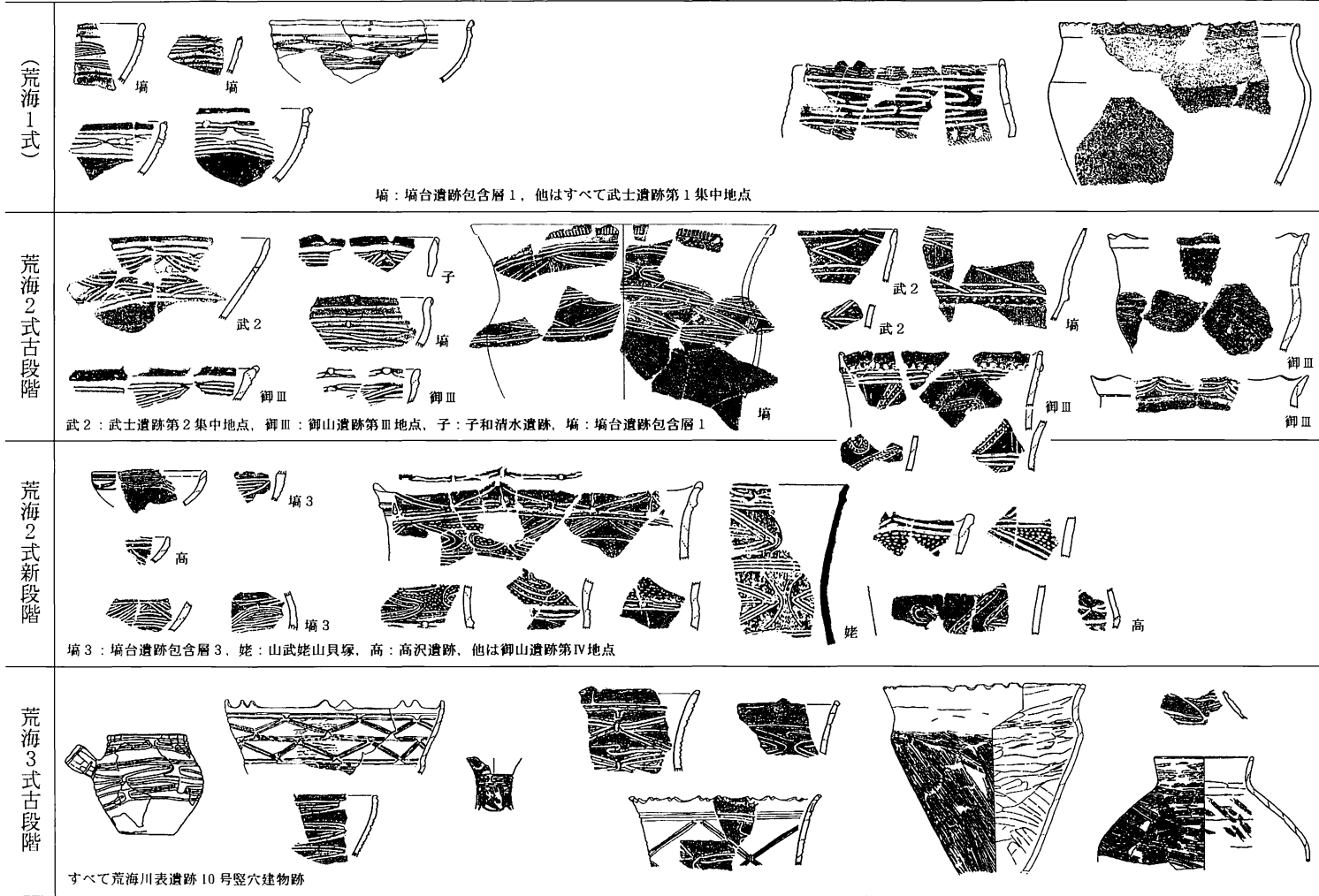


図14 荒海2式前後の土器群の変遷

なくなる傾向がある。その点についてはまた別の機会に触れてみたい。

上記をまとめたのが図 14 である。ここでは荒海 2 式を「古段階」及び「新段階」という名称で細分した。浮線文をもつ浅鉢形土器が盛行する最後の段階が荒海 1 式とすれば、荒海 2 式に求められる画期は、まず浮線文浅鉢が衰退し、それを継承する形で沈線文化した文様をもつ浅鉢形土器が登場する点に求められる。そして浅鉢形土器からみた次の画期はそうした沈線文浅鉢が小型化、減少し、さらに消滅する時点に求められる。その過程に現れ、変遷する浅鉢形土器の特徴は、冒頭に触れたとおり、谷口壜によって論じられた「矢頭式」から「田原 2 式」への過程に対比されるものとして捉えられる。一方甕形土器からみた画期は、雑書文系菱形区画を主体とする頸部文様帯の発達に求めることができる。かかる甕形土器は浅鉢形土器の変遷とともに変遷過程を追うことができるが、浮線文浅鉢を継承する浅鉢形土器の消滅後にも継承される。

雑書文系甕形土器は、荒海 2 式の枠内では 3 段階の変遷が終える可能性を指摘した。しかし小稿での細分は、あくまで浅鉢形土器の 2 細分を優先しておき、御山遺跡第Ⅲ地点の甕形土器を古段階のなかでの新相と考えておきたい。そして、次段階にもこれらを継承した雑書文系甕形土器が存在し、この器種だけをみれば大きな画期を経ることなく継続的にみえる。ところがほかの要素では、その時点で大きな画期が認められる。それは広範な地域で変形工字文が出現すること、雑書文系菱形区画とこの時点で消滅する稲妻状文との融合で新しいタイプの菱形連繫文が出現することがあげられる。また、現時点で荒海川表遺跡 10 号竪穴建物跡でのみ明確なことではあるが、粗製大型壺形土器が出現すること、浮線文浅鉢を継承する浅鉢形土器が消滅することは、きわめて大きな画期と捉えられる。これらの諸画期が存在するゆえに、筆者は

荒海川表遺跡 10 号竪穴建物跡の一括資料を荒海 3 式古段階とし、土器組成の変革が完了したこの段階を以て弥生土器の完成とした。したがって、荒海 2 式と荒海 3 式の境界は縄文土器と弥生土器の境界でもある。

## 5 おわりに

荒海式の細分諸型式の設定者である鈴木正博は、荒海 2 式を細分して「荒海 2a 式」「荒海 2b 式」としていること（鈴木正博、2004 ほか）は周知のとおりである。本来、荒海諸型式の細分を論じるのであれば、設定者の枠組みを尊重しなければならないはずであるが、筆者がここでそれらの呼称を用いなかったのは、捉えている土器の内容に違いがあるからである。その要因はいうまでもなく、鈴木が荒海貝塚を基準としているのに対し、筆者がそれ以外の遺跡を用いたことにある。現在もなお荒海式の最も重要な遺跡である荒海貝塚（あるいは旧長沼沿岸の遺跡群）は、千葉県内の同時期の数多くの遺跡に対してむしろ个性的である。そして荒海貝塚においては、変形工字文の出現と変遷が型式的に追求できることから、鈴木がの変形工字文に置かれているからである。しかし荒海貝塚以外では、変形工字文が認められるのが荒海 3 式以降であるために、まったく違った観点から検討せざるを得ない。今回は、谷口による「矢頭式」から「田原 2 式」への変遷を、房総側から検証することによって、それが鈴木正博とは異なる角度から荒海 2 式を検討することになった。今後も荒海貝塚以外の遺跡から荒海式の諸問題を追及していきたいが、荒海貝塚の研究成果とも突合しながらより真実に近づけていきたいと考えている。

## 引用文献

- 荒井世志紀ほか 2006. 志摩城跡・二ノ台遺跡  
 I 財団法人香取郡市文化財センター  
 石橋宏克・渡辺修一ほか 2001. 成田市荒海川

- 表遺跡発掘調査報告書 千葉県  
上村淳一 1979. 千葉東南部ニュータウン6  
椎名崎遺跡 財団法人千葉県文化財センター  
加納実ほか 1996. 市原市武士遺跡1 - 福増浄  
水場埋蔵文化財調査報告書 - 財団法人千葉県  
文化財センター  
杉原荘介・大塚初重・小林三郎 1967. 東京都  
新島田原における縄文・弥生時代の遺跡. 考  
古学集刊、第3巻第3号  
鈴木公雄 1963. 千葉県山武郡横芝町姥山山武  
姥山貝塚の晩期縄文土器について. 史學、36-  
1 三田史學會  
鈴木公雄 1981. 関東地方. 縄文土器大成、4  
講談社  
鈴木正博 1981. 「荒海」断想. 利根川、1:1-  
3,12 利根川同人  
鈴木正博 1985. 弥生式への長い途. 古代、80  
早稲田大学考古学会  
鈴木正博 2004. 「荒海式」変遷の背景—常磐  
弥生式前期への移行に観られる文化系統の一  
断面—. 茨城県考古学協会誌、16:67-94  
関口達彦ほか 1990. 千葉東南部ニュータウン  
17 千葉市高沢遺跡 財団法人千葉県文化財  
センター  
田中英世・築瀬裕一ほか 1987. 千葉市子和清  
水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡 財団法人千  
葉市文化財調査協会  
谷口 肇 1997. まとめ 第2章 縄紋時代末  
期～弥生時代初期. 宮畑遺跡 (No.34)・矢頭  
遺跡 (No.35)・大久保遺跡 (No.36) 第一東海  
自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調  
査報告3 財団法人かながわ考古学財団  
谷口 肇 2003. ポスト浮線文—神奈川周辺の  
状況— (その2). 神奈川考古、39:131-160  
西川修一・天野賢一・谷口肇 1997. 宮畑遺跡  
(No.34)・矢頭遺跡 (No.35)・大久保遺跡 (No.  
36) 第一東海自動車道厚木・大井松田間改築  
事業に伴う調査報告3 財団法人かながわ考  
古学財団  
若狭徹ほか 1986. 沖II遺跡 藤岡市教育委員  
会  
渡辺修一ほか 1994. 四街道市御山遺跡(1)  
財団法人千葉県文化財センター  
渡辺修一 1991. 四街道市内黒田遺跡群 財団  
法人千葉県文化財センター